

平成29年10月20日(金)

老球の細道365号

勝者と敗者を分けるもの

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今は昔、プロ野球の東北楽天ゴールドイーグルスが球団9年目で初の日本一に輝いたことがある。球団創設時から長い間下位ランクの成績で低迷していたチームだけに、関係者の喜びは格別のものがあったろう。新聞インタビューの嶋基宏選手の言葉である。

「毎年、優勝したい、日本一になりたいと思ってシーズンに入るが、それが実現できるとは思ってもみなかった。誰も想像できなかったし、僕たちも、ここまで来られるとは思ってもいなかった。本当に夢のよう」

当時の楽天星野仙一監督は選手、監督を通じて初の日本シリーズ制覇である。日本一になることがいかに困難なことかを物語っている。ところが、この「日本一」を1960年(昭35)から1975年(昭50)に引退するまで日本シリーズを9回連続、通算11回制覇した監督がいる。93歳で亡くなった川上哲治元巨人軍監督。「巨人、大鵬、卵焼き」で子ども時代を過ごした人たちは誰でも知っている日本プロ野球史上最高の監督だ。

熊本工業から巨人軍に入団し、選手としても首位打者5回、本塁打王2回、打点王4回を獲得し、監督になっても前述した大記録を残した。後に同じように日本シリーズ制覇の監督になった長嶋、王、広岡、森などはすべて巨人川上監督時代の選手である。

この川上元監督がプロ野球界を引退してから書いた『続・悪の管理学』(光文社)がある。当時ベストセラーになった本である。私は、この本を30年前に購入して読んでいる。川上監督が亡くなった時本棚から取り出して再読した。折しも、現役コーチ時代の選抜大会地区予選中であった。いつもと同じチームとの決勝戦となり負けた。この本に記されている「勝者と敗者を分けるもの」という内容がわがチームとだぶったことを思い出す。

【大志、大欲に忠実であれ。人は、ただそれを持ち続けるだけでいい。しかし、えてして、小さな成功が、すぐ、人を満足、慢心させてしまう。大志、大欲が消える。せつかくの大事が花開くことなく、しぼんでしまう。もったいないことだ。

欲望に忠実であることは、人間らしさの裏返しでもある。勝ちたい、お金がほしい、地位がほしい、名誉がほしい、なにも照れることはない。しかし、それは大志、大欲につながるものでなくてはならない。大事をつぶしてしまうもの、それは小志、小欲である】

全国大会を目指しているチームと県大会出場を目指しているチームとでは戦う前から結果は見えている。同じように全国大会出場を目指すチームと全国優勝を目指すチームとでも結果は歴然としている。「目標の高さ」の差は毎日の練習の取り組みに影響を与え、その日々の積み重ねの差ははかり知れないものになる。どんな大会でも常に、最終日に観客席で見物する立場になるよりコートで戦う当事者になりたい。

今年も県高校選抜大会、ウインターカップ県予選が迫ってきた。大会の男女決勝戦、男女3位決定戦、いずれも見ごたえのあるナイスゲームになるだろう。観客席では最終日のコートでプレーできないチームの選手たちの様子を予想する。観客席最前列で身を乗り出しながら、さも自分がプレーしているかのように観戦するチーム。後ろのほうで他人ごとのように居眠りをしているチームもいる。人生色々、高校生も色々である。しかし、この姿を見れば、次の新人戦の結果、来年の結果はすでに決まってしまう。